

美しすぎるあなた／エディ・ヒギンズ

アルバム『美しすぎるあなた』は、ジャズ・ピアノの巨匠で、近年大人気を博しているエディ・ヒギンズの《ロマンス4部作》のラストを飾る作品。このシリーズは選りすぐりのラブ・ソングの名曲を50曲録音、それを4枚のアルバムに収録して2007年内に順次発売するという壮大なプロジェクトだ。これまで第1弾『素敵なロマンス』（13曲）、第2弾『恋に過ごせし宵』（13曲）、第3弾『秘密の恋』（12曲）が登場、今回の『美しすぎるあなた』（12曲）でシリーズは完結した。録音期間は4日間、メンバーはピアノのエディ・ヒギンズ、ベースのジェイ・レオンハート、ドラムのマーク・テイラー。今年ヒギンズのヴィーナスレコード10周年であり、また初リーダー作の録音から50周年にあたるアニバーサリー・イヤーでもある。ヒギンズのキャリアの中でこのヴィーナスレコード時代は、まぎれもない全盛期になった。ヴィーナスは日本のジャズ・レーベルなので、ヒギンズ人気は日本がメインではあるものの、最近ではアメリカでもヴィーナスでの活躍が注目されており、人気が高まっているようだ。日本のジャズ・レーベルが本格的に海外アーティストを録音するようになって30年以上が過ぎたが、このような例は大変珍しい。

ヒギンズは1932年2月21日マサチューセッツ州ケンブリッジ生まれで、シカゴでプロ活動を開始した。シカゴの有名なジャズ・クラブ“ロンドン・ハウス”で12年間にわたりハウス・ピアニストとして活躍。その後はフロリダに活動の拠点を移した。夏になれば、故郷から近い高級避暑地のケープ・コッドで静養し演奏も行なう、というはた目からみれば悠々自適のスロー・ライフのように思える生き方だ。世界のジャズの中心地、ニューヨークとは距離を置き、マイベースの音楽活動を続けている。ヴィーナスがヒギンズと契約した頃には、十分すぎるほど円熟したピアニストだった。当初はもっと早く契約していればそれだけたくさん作品が聴けたのにと思ったりもしたが、ヒギンズのゆとりある優雅なジャズ・ピアノを録音するのには、ちょうどいい時期だったのかもしれない。ベテランになってからこれほどの実り豊かなシーズンを迎えたジャズメンはいただろうか。豊富な経験を重ね、ジャズマンとして人として心身共に充ち、熟したライブ・スタイルから生まれてくるジャズが、ここにある。そして、人生に対するのと同じように、愛についてもヒギンズはぼくらの大先輩であり、音楽への愛、奥さんへの愛、リスナーへの愛…さまざまな愛する思いが伝わってくるのが、この《ロマンス4部作》である。

ヒギンズの奥さんはジャズ・シンガーのメレディス・タンブロッシオだ。ヒギンズのアルバム『懐かしのストックホルム』の解説にメレディスとの出会いについて書かれている。筆者は見山紀芳氏。印象的なストーリーなので抜粋させていだこう。ヒギンズの言葉だ。「1987年7月だったかにケープ・コッドの別荘で静養していたときに知り合ったんだ。たまたまラジオから流れていたジャズ・ボーカルがあんまり素晴らしいのでしばし聞き惚れていたんだ。(中略)そしたら番組の途中でD Jが『おききいただいたメレディスがケープ・コッドのクラブに出演しています』っていうじゃないか。さっそくそのクラブに聴きに出かけたんだよ」。ヒギンズはそのライブに飛び入りすることになり、2人は意気投合。1年後に正式に結婚した。もちろん初婚ではなかった。まるで、ラブ・ロマンス映画のようなドラマティックな出会いだ。結婚後、2人はしばしば共演している。歌件をすることも少なくないヒギンズは、ラブ・ソングやスタンダード・ソングのレパートリーが数え切れなくあるのだろう。

ラブ・ソングやスタンダード・ソングと書いたが、実はスタンダード・ソングの大半はラブ・ソングでもある。ほくがそのことに気づいたのは、ジャズ・ファンになって何年も経ってからだった。インストゥルメンタルの場合は、歌詞にちゃんと留意して演奏するジャズメンはそんなに多くない。しかし、ヒギンズのように原曲のメロディーを大切にして演奏するジャズメンは、大抵、歌詞もしくは歌詞の大意を把握して演奏する。また、歌件の場合は、当然、歌詞が密接に関係してくる。スタンダード・ソングの歌詞の大半が恋愛または愛に関するものであることはとても興味深い。熱烈なラブ・ソングから、少しだけ

You Are Too Beautiful

美しすぎるあなた

Eddie Higgins Trio

エディ・ヒギンズ・トリオ

- バークレイ・スクエアのナイチンゲール **A Nightingale Sang In Berkeley Square** 〈M. Sherwin〉（4：46）
- 君は我がすべて **All The Things You Are** 〈J. Kern〉（5：53）
- ラヴァー・マン **Lover Man** 〈R."Ram" Ramirez, J. Sherman〉（4：58）
- ライク・サムワン・イン・ラブ **Like Someone In Love** 〈J. Van. Heusen, J. Burke〉（6：31）
- ある恋の物語 **Historia de Una Amor** 〈C. Almaran〉（4：05）
- エニシング・ゴーズ **Anything Goes** 〈C. Porter〉（4：38）
- イン・ア・センチメンタル・ムード **In A Sentimental Mood** 〈D. Ellington〉（4：39）
- 夜の静けさに **In The Still Of The Night** 〈C. Porter〉（4：28）
- 我が心のジョージア **Georgia On My Mind** 〈H. Carmichael〉（4：49）
- ブルー・ボッサ **Blue Bossa** 〈K.Dorham〉（4：10）
- ユー・アー・トゥー・ビューティフル **You Are Too Beautifu** 〈R. Rodgers〉（4：50）
- アイル・ビー・シーイング・ユー **I'll Be Seeing You** 〈S. Fain〉（5：08）

エディ・ヒギンズ Eddie Higgins 〈piano〉
ジェイ・レオンハート Jay Leonhart 〈bass〉
マーク・テイラー Mark Taylor 〈drums〉

録音：2006年10月14～17日　ザ・クリントン・スタジオ、ニューヨーク
<p>⒫ Ⓒ 2007 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.</p>
<p>*</p>
<p>Produced by Tetsuo Hara & Todd Barkan Recorded at Clinton Studio in New York on October 14 ~17, 2006 Engineered by Troy Halderson Mixed and Masterd by Venus Hyper Magnum Sound：Shuji Kitamura and Tetsuo Hara Front Cover:🇯🇵 The Estate of Jeanloup Sieff / G. I. P.Tokyo Designed by Taz</p>

恋愛に関係する曲までさまざまではあるが、スタンダードには愛に関する事柄があふれている。それほどまでに、人は愛を欲し、何よりも愛を大切にすることをあらわしているのだろう。ヒギンズの《ロマンス4部作》には、ぼうだいにあるラブ・ソング＝スタンダード・ソングの中から、ヒギンズとプロデューサーが選り抜いたラブ・ソングの名曲中の名曲が収録されている。この『美しすぎるあなた』で完結するシリーズの全50曲の名曲・名演にあふれる愛に耳をじっくり傾けよう。
なお、ジェイ・レオンハートは1940年12月6日、メリーランド州ボルチモア生まれ。フリーランスのベースの名手として長年ニューヨークで活躍。作詞家でもある。娘のキャロリン・レンハートはジャズ・シンガー。マーク・テイラーは英国出身で、1962年11月7日、ロンドンのハムステッド生まれ。1988年～95年まで、プリティッシュュ・ジャズ・アワード《ベスト・ドラマー》部門でノミネートの常連だった。96年に秋吉敏子〜ルー・タバキン・ジャズ・オーケストラから誘いを受けて、ニューヨークへ進出。それ以来、タバキンのバンドをはじめ、モンティ・アレキサンダー、ケニー・バロンなどと共演。歌件も多い。

1. バークリー・スクエアのナイチンゲール　イギリス発のスタンダード・ナンバーで、マニング・シャーウィングが作曲、エリック・マシュウィッツが作詞した。出版は1940年。ロンドンの公園バークリー広場を描いたロマンティックな曲だ。アニタ・オデイやマンハッタン・トランスファーのアカペラのバージョンなどが有名。ヒギンズのスローな演奏は、歌詞の情景がみえてくるような情緒にあふれている。

2. 君は我がすべて　ミュージカル『ペリー・ウォーム・フォー・メイ』（1939年)のためにジェローム・カーンが作曲、オスカー・ハマースタイン2世が作詞した。原題は「オール・ザ・シングス・ユー・アー」。チャーリー・パーカ

ーをはじめビバップのジャズメンが演奏し、モダン・ジャズの人気スタンダードになった。ヒギンズは前奏を付けてからテーマに入り、ホットなジャズ演奏を展開する。ジャズメンが熱くなる曲なのだろう。

3. ラヴァー・マン　ヒギンズがブルー・バラードの名演を聴かせるこの曲は、ジャズ・シンガー、ビリー・ホリデイが得意レパートリーにした失恋の歌。ビリーのファンだった無名の青年ジミー・デビスが歌詞を書いて彼女へ進呈。ビリーがロジャー・ラミレスとジミー・シャーマンに作曲を依頼して出来上がった。出版は1942年。

4. ライク・サムワン・イン・ラブ　映画『ユーコンの女王』（1944年)のためにジミー・バン・ヒューゼンが作曲、ジョニー・パークが作詞した。いつの間にか、恋をしていたようだ。そんな心理を描いたラブ・ソング。インストゥルメンタルの名演も多い曲だ。ヒギンズ・トリオはゆったりしたテンポでノリのいい演奏を聴かせる。

5.ある恋の物語　メキシコのロス・アルマランが1955年に作曲したボレロの人気曲。原題はスペイン語の「Historia de un Amor」で、英語では「A Love Story」。トリオ・ロス・バンチョス、イーディ・ゴーム、フリオ・イグレシアス、ナナム・スクーリなどの歌が知られている。《ロマンス四部作》の全50曲の中で、この曲のみプロデューサーの要望で2度目の録音になったそうだ。エレガントな哀感をたたえたヒギンズの演奏は、文句ナシに素晴らしい。

6. エニシング・ゴーズ　ヒギンズ・トリオがリズムカルな楽しい演奏を展開するこの曲は、コール・ポーターがミュージカル『エニシング・ゴーズ』（1934年)のために作詞作曲した。“Anything Goes”は「何でもあり」「自由気まま」などの意味。自由奔放に生きたポーターにぴったりの曲名だ。『インディ・ジョーンズ／魔宮の伝説』など映画でもよく取りあげられる人気曲だ。

7. イン・ア・センチメンタル・ムード　デューク・エリントンが1935年に作曲したジャズ・バラードの名曲。センチメンタルなムードで愛されることを願う歌詞は、アービング・ミルズとマニー・カーツが共作した。ヒギンズは原曲のメロディーを切々と演奏した後、素晴らしいアドリブを聴かせてくれる。

8. 夜の静けさに　ヒギンズが快適でスインギーな演奏をみせるこの曲は、コール・ポーターが映画『ロザリー』（1937年)の主題歌として作詞作曲したナンバー。フランク・シナトラ、エラ・フィッツジェラルドなどボーカルの録音が多い曲だ。

9. 我が心のジョージア　「スターダスト」を作曲した国民的作曲家ホーギー・カーマイケルの代表曲。作詞はスチュワート・ゴレレル。出版は1930年。レイ・チャールズがオハコにした。ヒギンズはこの曲にふさわしいトレモロを使いながら、情感あふれる演奏をみせる。

10. ブルー・ボッサ　ジャズ・ボッサの人気曲。トランペット奏者ケニー・ドーハムが作曲した。アメリカのボサノバ・ブームの時、ドーハムが参加したテナー・サクソ奏者ジョー・ヘンダーソンのアルバム『ページ・ワン』（1963年)で発表された。ヒギンズ・トリオの演奏もボサノバ・リズムで、モダン・ジャズの魅力を伝える。

11. ユー・アー・トゥー・ビューティフル　アルバム『美しすぎるあなた』のタイトル曲で、“あなたは美しすぎて、わたしはただおどけるしかない”と歌われるロマンティックなバラード。アル・ジョルソン主演の映画『風来坊』（1933年)のためにリチャード・ロジャースが作曲、ロレンツ・ハートが作詞した。『ジョン・コルトレーン&ジョニー・ハートマン』のバージョンが有名。ヒギンズのピアノ演奏もこれ以上ないと思えるほど美しくエレガントだ。

12. アイル・ビー・シーイング・ユー　1938年にサミー・フェインが作曲、アービング・カールが作詞したセンチメンタルなバラード。フランク・シナトラ、ビング・クロスビーがヒットさせた。昔の恋人にもう一度あの場所で逢いたいと歌われるナンバーだ。ヒギンズは洒落なテイストの演奏で、アルバムを締めくくっている。

（高井信成）